

文化

今から100年前の1923年（大正12年）9月1日、マグニチュード7.9と推定される関東大震災が発生した。市電（後の都電）も下町の路線全域で壊滅的な被害を受ける。しかし、山手側は比較的影響が少なく、特に第一次世界大戦（1914～18年）に伴う好景気を受けて大規模再開発を終えていた渋谷駅は、深刻な被害を免れた。

1885年（明治18年）開業の渋谷駅は、現在より南寄り（現位置に移設前の埼京線ホーム寄り）にあったが（図1）、1920年（大正9年）に現在の位置に新駅舎が完成。三宅坂を出發して青山通りに沿って走り、宮益坂下から南に曲がって旧渋谷駅舎方面に向かっていった市電青山線は、ガードをくぐった先の現在のハチ公前広場を新たな終点とした（図2）。それは、震災の5ヵ月前にあたる23年3月29日のことであった。

『自伝的小説「幼年」』
人々の生活の陰影と市電とももとも密接に結びついてきたのは、大正から昭和初期にかけての時期であろう。長く渋谷エリアに住んでいた作家・大岡昇平（1909～88年）の自伝的作品『幼年』（73年）から、震災前のエピソードを一つ紹介する。ある日、昇平少年は母に連れられた父に乗って六本木の伯父（父の兄）の家を訪ねる。

電車を降りようとする
と、母は車掌に呼び止める
れた。私の分の電車賃を払
てしまう。母は「わい顔を
して、私の腕をつねった。
そしてこのことを伯父の家
へ行って、もいってはいけ
ない」といった。

昇平の父・貞三郎は米相場、綿糸相場で失敗し、その後、株の売買を行ったがうまくゆかず、経済的に苦しい生活が続いていた。やはり株

昇平という子を設けたのでやむなく入籍が認められ、これと前後して、既に5年前に生まれたい女児も正式に昇平の妻姉として認知することを許されたのである。父も母も親類に対して常に気兼ねしながら暮らしていたと昇平は語

の仲買をやっていた伯父の家は裕福だったので、昇平の両親をいろいろと助けにくれたようだ。自らと限度もあった。そこには、和歌山の大地主だった大岡の家が、そもそも

『農災後——少年』
しかし1918年、旧渋谷

『少年』
注を拾って、何食わぬ顔

それ（道に落ちていた無効の乗車券のこと）引用者
のようである。この時

都電ゆかりの文学者 中

～大岡昇平～



図1 1914年（大正3年）頃。渋谷駅は現在よりも南寄りにあった



図2 1924年（大正13年）頃。玉川電車も天現寺方面に延伸した

井上 隆史

白百合女子大学教授
たかしのうら
史隆上井
で渋谷行の電車に乗るのが中学生の楽しみだった。車掌も様子でわかるのだが、大抵は見逃がしてくれる。古き良き時代であった。
そんな切符の見つからない時でも、ボギー車（前後4輪ずつの8輪車引用者注）のドアの外の、わずかな隙間に、片足をかけて乗って行く手がある。ドアの開閉は運転台のエア・ブレーキと直結した車がこの頃から出始めていた。ドアがしまり、走り出してから飛び乗れば、車掌はわかっている。臨時停車の合図をしなければ、私を追払うことはできない。半ば心配そうな大人の顔をガラス戸越しに見ながら、宮益坂を下って行くのが、何となくえなない気持ちである。宮益橋（当時、ガードの手前にあった渋谷川に架かっていた石橋「引用者注」）を渡り、ガードをくぐり、その先のカーブの手前、スロ―・ダウンするところで飛び降りて逃げてしまふ。
市電の終点に面して喫茶店やパン屋が大きな店舗をかまえるなど、駅前にはきまかただった。街自体がいわば遊園地のようなものである。この時
の昇平は、電車賃をごまかさなければならぬほど貧しかったわけではない。ただ、遊び心が勝ったのだ。
『代表作「レイテ戦記」』
だが、景気の浮き沈みは激しく、1931年（昭和6年）、株の大暴落によって貞三郎は破産し、37年には62歳で亡くなった。昇平は好きな文学の道を諦め、生活のために神戸の帝國酸素という産業ガスのメーカーに入社する。その時、洋服を新調する金を伯父に借りようとして断られたことは、深刻なショックだった。
その後、44年7月、昇平は召集を受けてフィリピンに派兵されたものの、マリリアに罹患して45年1月に米軍の捕虜となる。帰国後、この体験を基に『伊藤日記』（48年）、『野火』（52年）を著した。ともに高い評価を得て、昇平は戦後文学を代表する作家の一人となる。
さらに、「日米の雌雄を決する天王山」（小磯昭首相の言葉）と呼ばれる、日本兵8万人の戦死者を出したフィリピン・レイテ島での死闘を膨大な資料を駆使して描き、戦争文学の金字塔である『レイテ戦記』（71年）を刊行し

た。ちなみに、米軍の戦死者は35000人ほどだった。
『レイテ戦記』は全30章、原稿用紙で1000枚に及ぶ巨編である。中でも、レイテ沖海戦でレイテ湾突入計画を急遽変更して反転した栗田艦隊の事例と、リモン峠における日米の激闘を詳細に分析するが、その結論として、昇平は最後にこう書いている。
レイテ沖海戦におけると同じく、ここにも日本の歴史全体が働いていた。リモン峠で戦った第一師団（帝國陸軍の最古の師団の一つ）引用者注の歩兵は、栗田艦隊の水兵と同じく、日本の歴史自身と戦っていたのである。
ここで昇平は、レイテ戦を描きながら、実はそこに否応なく反映する日本の近代史の本質を読み取ろうとしている。一見無関係のように見えるかもしれないが、『幼年』や『少年』における創作方法も、実はこれと同じだった。私たちが昇平の語る市電をめぐるエピソードを読みながら、東京の近代史の壁画をそこに見て取るのである。